てるびっと

1994. 12.

創刊号 No.1

京都府・海外研修ＫＹＯのあけぼの会

赤の広場からみたクレムリン宮殿

CONTENTS

ごあいさつ　京都府知事　荒巻　禎一　・・1
会　長　田中田鶴子

特　　集　・・2
▶心開かれた日本の実現を
日本国際連合協会京都本部常任理事・事務局長　大野　明
▶「違い」を認識することから　太田　緑

第11回海外研修報告「ロシア」　山下　弥生　・・3

この1年をふり返って　山下　弥生　・・4

京都府名誉友好大使との交流

ねっとわーく　小泉　和子・稲味　史子　・・5
高島シズ子・武田　公子

総会報告とおしらせ　・・6

表題「てるびっと」は、京都府知事荒巻禎一様の直筆で、インドネシア語（京都府友好国）「あけぼの」の意味です。

表紙絵について
京都府に息づく豊かな自然の美しさ、「花」しだれ桜、さが菊。「木」北山杉。「鳥」オオミズナギドリ。を戸塚フランス刺しゅうで表現したものです。

『てるびっと』創刊にあたって

京都府知事　荒巻禎一

『てるびっと』の創刊を心からお祝い申し上げます。

「ＫＹＯのあけぼのプラン」がスタートした平成元年に、皆様方が「海外研修ＫＹＯのあけぼの会」を結成され、それ以来、豊かな地域社会づくりや、女性団体のネットワークの強化、また国際交流の促進等、幅広い分野において指導的立場で活躍していただいていることに対し、心から敬意を表します。

この機関誌「てるびっと」が、会員の皆様方の情報交換の場として活用され、会の活動がますます盛んになりますことを願ってやみません。

「ＫＹＯのあけぼのプラン」も今年度をもってその前期推進期間が終了することから、高齢化や少子化等の女性を取り巻く急速な社会の変化を踏まえて必要な改定を行った上で、来年度から後期推進期間をスタートさせることになっております。どうか皆様方におかれましても、男女共同参画社会の創造をめざすこのプランの推進に一層の御協力をいただきますようお願いする次第であります。

終わりになりましたが、会員の皆様のご健勝と会の今後ますますの御発展を心からお祈り申し上げます。

『てるびっと』発刊にあたって

海外研修ＫＹＯのあけぼの会
会　長　田　中　田鶴子

師走の声を聞いて、急に寒さが募ってまいりましたが、会員の皆様方におかれましてはますますご活躍のこととお喜び申しあげます。

本会は平成元年９月に創設して以来、早くも５年が経過いたしました。この間、私自身会長として皆様と共にいろいろな事業に参加し、この会を通じた女性関係団体のネットワークから数多くのことを学び得たと喜んでいるところでございます。

そしてこのたび、機関誌『てるびっと』の第１号を発刊する運びとなりました。“てるびっと”とは、インドネシア語で“あけぼの”という意味であり、まさに本会の発刊誌に相応しい名称であると思っております。

また、創刊にあたりましては、常々何かとご支援いただいております荒巻知事様からの直筆の題字をいただきますとともに記念のごあいさつまで頂戴し、心より御礼申し上げる次第でございます。

今後、当誌を通じて会員相互の緊密な連携を図り、より強力なネットワークづくりのためのコミュニケーションツールとして役立てていきたいと考えております。皆様方からの積極的な情報提供をお願い申しあげます。

『てるびっと』創刊にあたりまして、さらに活発な事業活動を目指してまいりたいと存じておりますので、関係各位の倍旧のご支援ご指導並びに会員各位の一層のご協力をお願い申しあげます。

特集

▶心開かれた日本の実現を◀

日本国際連合協会京都本部常任理事・事務局長
京都府「世界に広がる国際化社会」推進懇談会委員　大野明

2，3年前にみなさまの学習会に招かれ，国際情勢について講義したことがございます。いつも前向きに活躍されている京都府海外研修ＫＹＯのあけぼの会が今後大きく発展されますことを期待しています。

古くから旅人は新しい知識，情報をもたらしてきました。それは未知の土地の景色やそこに住む人人についておもしろく伝え，外界を知るのに役立つ話だったと思います。旅人の話に出てくる世界へ行ってみたい，住民に会ってみたい―そんな願望をきっと抱いたことでしょう。これは旅行も制限されていた封建時代の話ですが，現在では通信，交通技術が発達し，国内ばかりでなく，世界の国国へ旅するのも大変容易になりました。TVが伝える映像から得た知識も加わり，遠かった外国が身近になってきました。どこの国にも長い歴史の中で独特の文化が培われ，国民の思考も宗教も私たちとは同じでない。地球が狭くなったとはいえ，五十六億余の人類が相互に理解し合うことは並大抵ではないのです。

わが国が積極的に西欧科学文明を採り入れ，わが国を近代国家に築きあげたのはつい百年程前のことでした。それほど西欧社会に傾倒し，先進国に仲間入りしたにもかかわらず，このところ日本の閉鎖性を攻める声が強烈に響いています。産業，経済はもとより文化など社会全体が外に門戸を閉ざしているという批難です。また日本人の「心の狭さ」も指摘されています。「島国だから」という人もいますが，同じ島国の英国人の行動はどうでしょうか。反省すべき問題の一つかもしれません。

わが国経済界では円高やバブル崩壊後の不況の影響で産業の空洞化とか消費者には利益ある価格破壊などが起きています。好むと好まざるにもかかわらず，わが国は開放政策を進めねばならなくなりました。世界の国国が足並みを揃えて貿易の自由化を促すためＷＴＯ(世界貿易機関)も発足します。

ご存知のようにわが国は経済大国のひとつです。いま世界にある百九十カ国の三分の二は貧しい国国であり，そのうえ紛争が各地で絶えない状況です。わが国にその紛争解決や平和維持のための協力が求められています。また貧困に苦しむ人人への海外援助も要請され，そのことはわが国の責務だとさえいわれているのです。ＯＤＡ(政府開発援助)のわが国拠出額は百十億ドルとアメリカのそれを抜きました。

いま，わが国は国際化を推進しています。「日本文化のふる里」の京都も行政，大学，マスコミはじめ草の根グループに至るまで多方面で国際交流の事業が展開されています。

留学生など外国人と市民との交流も盛んになってきました。建都千二百年の記念事業もグローバルなスケールのものが数多く開かれました。

世界の情勢は刻刻変化していきます。二十一世紀に入れば国際理解を深めることがさらに必要になると思います。それにマルチメディアの出現で情報氾濫が起きると予測できます。

これから私たちも諸外国を訪問する機会を数多くつくり，その国の認識を深めると同時にわが国へのファンづくりに努めたいものです。もちろん外国からのお客さまも大歓迎です。「日本人の心が開かれた」「日本はもう鎖国でなくなった」と世界の人人から賞讃される日がいつ来るか待ち遠しいです。

▶「違い」を認識することから◀

太田　緑
（1985年研修参加）

海外旅行者の数が年間1179万人にのぼるという今日、「海外」は非常に身近なものになっています。テレビなどを通じ、実際にその場に行かなくても、様々な土地の様子を知り、文化を垣間見る事が出来ますし、世界中の食べ物・飲物もデパートに行けば手に入るようになりました。海外への団体旅行も、日程・目的地によっては、国内旅行よりも安価である事もあります。そうした中で、「海外」に於ける「研修旅行」はどの様な意義を持つのでしょうか。

一般の海外旅行と研修を目的とした海外旅行の大きな相違点は、参加者の目的意識の違いである事は明白です。美術・博物館見学もよし、名勝見物もよし、美味しいものに舌鼓を打つもよし、買物もよし。研修旅行には、こうしたいわゆる海外旅行の楽しみの他に、新しい自分の発見という宿題が与えられます。

研修旅行の成否は出発前の準備の時点でかなり決まるといわれています。自分たちが何を求めてこの旅行を計画し、実行していこうとするのか。訪問国の政治・経済・社会事情や、日本との歴史的な繋がり、現在の関係。気候や食事・言葉の事など、出発前には心配はつきません。

でも、正直な話、行ってみないとピンとこないのですよね。自分の目で見て、足で歩いて、失敗もしたりして。その上でもう一度訪問国について興味を持って調べたり、読んだりすると、同じ案内書でも10倍おもしろいのはもう皆様も御経験の通りだと思います。

異文化に接して、何を感じ、何を考えるかは、個人の生活や経験によって違うと思います。個人差はあれ、全ては「違いを認識すること」から始まります。今まで自分が持っていた価値観が、大きく変化することもあるでしょう。研修旅行の持つ本当の価値はそうした変化をそのままに捨て置かず、自分を磨き続ける事にあるのではないでしょうか。

世界にはいろいろな文化があり、いろいろな人間が居るのだという事、そしてそれはあるがままを認めるべきで「優劣」をつける事ではないのだという事を、私はこの９年間の海外生活の中で強く感じています。「違い」を認識した上で、それを尊重できるかどうかが、今後の日本、そして日本人に与えられた課題のような気がします。

●●● 1993年京都府女性海外研修「ロシア」●●●

山下弥生
（1993年研修参加）

はるかな北の大地ロシア連邦、私達は未知へのときめきと緊張感で一杯でした。モスクワに着いた私達の眼前に広がった光景は、ホテル近辺や地下道に群する老若の男性達、人形を抱いて物乞いするジプシー、町をぶらつくアルコール中毒の男性など行く人達の表情はインフレに悩むロシアの苦悩でした。

反面、クレムリンの城壁と赤レンガ造りの国立歴史博物館・グム百貨店・色鮮やかなワシリー寺院に囲まれた赤の広場（アカ …… ロシア古語・美しいを意味する）やクレムリン宮殿では、その美しさ雄大さに感嘆しました。レーニン廟の衛兵の交代も私達の帰国直後に廃止され、ロシア変革の一時期を見ることが出来た思いがします。レニングラード州サンクトペテルブルグへ向かう夜のモスクワ駅構内で、地方へ出稼ぎにゆく人々の雑踏を縫って乗り込んだシベリア鉄道の夜行列車「赤い矢号」は各室錠をかけた上、ロープで括りつける程の治安の悪さに緊張しましたが、夜が白むにつれて車窓の大草原に点在する民家の風景に感動し無事に到着しました。

サンクトペテルブルグは静かな落ち着いた街並みでした。その歴史を秘めて滔々（とうとう）と流れるネヴァ河・エルミタージュ美術館や多くの宮殿・寺院はロシア帝国の首都として政治文化産業の中心であったことの証であり、京都に似通う親しさを感じました。州庁での公式行事を通して、ベリヤコーフ知事の素朴でおおらかな人柄、母親の様なシドローヴァ副知事（７名の副知事の内ただ一人の女性）州庁のスタッフの温かい心配りを受け、数多い福祉、教育施設の研修と友好親善を重ねました。

そこで出合った婦人同盟の代表者達からは、社会体制の変化により働く場を失い生活不安に陥った女性を社会的に守るために組織を結成し、女性を守る立法の権利を獲得したこと、家族や子供のために「くらし」の安定を図ることを第一課題とし、自分達で企業を企し、マスコミを通じて主婦達を励まし活動する辛抱強い大きな心にパワーを感じました。一方彼女達はロシア帝国のプライドをもち絢爛なファッションの流れを失うことなく質素な中に、おしゃれと気品を備える女性達でした。

和服姿の服部団員は着物文化を通して本当に大きな交流の花であったことは言うまでもありません。州立病院へ贈った注射器はマスコミを通し全国に紹介される程、非常に喜ばれましたが、改めて医療器具の不足を痛感しました。

郊外にあるガッチナ市は旧貴族の別荘地として発達した教育レベルの高い町で、奨学金のスポンサーも多く、英才教育が発達していました。多くの教育の場・研究の場がある町でした。保育園や養護施設も緑の環境の中にカラフルな設備のルームがあり、一才半から七才までの幼児がそれぞれの個性に応じて完全に保育されていました。働く女教師は身だしなみ良く躾と情操教育に責任と自信を持って当たっていましたし、養護施設でも治療を施しつつ子供に夢を持たせた職業指導がされ、昔の村の生活用具等展示の部屋もあって芸術を愛する心を養っていました。

ソマノヴィボル市は原子力関係の仕事の町、若い労働者によって創られた平均年令32才の市制20年の青年都市でした。放射能の危険を考え一般労働より国の補償も確保されて居て、そこで働く人々の給料は普通労働者の約２倍、９万５千ルーブルで45才より年金が支給されるなど経済不安のロシアにあって優遇されていました（注・給料労働者平均４万２千ルーブル、医師２万８千ルーブル、看護婦３万ルーブル）生活困難な為出生率が50％も低下している国でしかも危険と隣合わせの地域にも拘らず８人の子宝家庭が多く、町の３分の１世帯が３人以上の子供を持ち生活は簡素ではありますが子供にはピアノやバレーを学ばせ母親が育児や食事に愛情を込めて暮らしているゆとりを感じさせられました。この背景には、３人目の子供出産よりホームヘルパーが派遣され、一人２千ルーブルの子供手当が支給され、母親の育児休業終了後の復職の保障がある故だと思いました。子供のための「お伽の町」が創られ子供人形劇場もあり18才までの子供が芸に精進している姿にも個性を伸ばす教育に力が入れられているのがわかりました。

しかし日に日に経済状態悪化の波が押し寄せている実情は否めず、従来は国に大きく依存していた生活や補償は州に移行し、現在は個人の独立採算の生活へと変動する大きな混乱を感じました。人気の無い住宅用ビル・配給に並ぶ人列、街角の表情に暮らしを守ることの困難さを垣間見ました。私達は経済大国と言われる日本人の心の豊かさの欠乏を自覚させられると共に、21世紀の担い手である子供たちが健やかに育つことへの願いは、言葉や政治の壁を越え世界共通であることを再認識しました。ヘルシンキやパリでも女性の地位向上の先進国としてまた個人を大切にする老人福祉に関わって活躍する多くの女性達に学ぶことの大きい研修でした。

この一年をふり返って

山下弥生
（1993年研修参加）

第11回京都府女性海外研修で訪れた３ケ国、特にロシアを訪問出来たことは、私の日常生活の「偏見」を大きく考え直す機会となりました。出合った人達の大自然に育まれた暖かくおおらかな心や、社会の体制が如何に変わろうとも、伝統に誇りをもち、争えぬ気品を備えた女性達が示した「ロシアが好きなんだ」と言う心は、日を経るほど実感として理解出来るようになりました。「情報化の時代」と言われる昨今、世界の状況を手にとるように知る事が出来る我々ですが、それぞれの国の文化や風土の中で人と出合ってこそ、親密な気持ちで手が取り合える体験をさせて頂きました。「交わって相手を正しく理解する」これこそが「偏見」を打ち破る源であり、行動する勇気をもつことを今回の研修から教えられました。

事後の私達のグループは、各自がそれぞれの立場で多忙ではありますが、グループを「Red Arrow（レッド アロー）」と名付けました。シベリア鉄道の特急夜行列車の名前です。未知へのときめき・緊張・冒険・感動・忘れられない夜汽車、ある時はガタンゴトンと横揺れに、またスピードをあげてサンクト・ペテルブルグを目指して大高原を一途に走り続けたのです。あたかも、私達の今後のライフ・スタイルのように、いつまでも元気で乗り合わせたい願いを込めて情報交換をはかって研鑽しています。

春にはロシア国立レニングラードバレエ団大阪公演で「白鳥の湖」を観劇し、通訳のヴァタリー・シーリイ氏と懐かしく再会、ロシアの芸術に感動し旅の思い出を再確認しました。

京都府とレニングラード州の姉妹提携の実現に、熱い熱い期待と、何かお手伝いがさせて頂きたい思いで一杯でおります。

政治や言葉の壁を乗り越え、主婦の立場からまた自らの仕事を通して、先ず、日本に在住する外国の人々の文化や暮らしを理解し、京都の文化をアピールしながら、仲良く手をつないでゆきたいと願っております。

楽しく語り合い京都を愛する「なかま」の輪が出来ました事を心から誇りに思います。

●●● 京都府名誉友好大使との交流 ●●●

留学生による家庭料理の講習会

◀ 会場：ウイングス京都

今回はチキン・アドボ鳥肉煮込み料理で、フィリピンの代表的家庭料理でした。
今後２ケ月に１回程度実施予定です。

留学生へ日本伝統の着物着付講習会

会場：京都府婦人センター ▶

今回は日本留学を終了した女子学生の希望もあって、ゆかたの着方を覚えてもらいました。

ねっとわーく

京のあけぼの

高島シズ子

京都府が京の「あけぼの」という女性の会を発足されたと聞いて、当時私は目の前が明るくなったものでした。京都の各女性団体の代表が集まっての研修旅行も開催され、私も平成元年ヨーロッパ研修に参加致しました。私は、商工会議所婦人会代表という事で経営者の立場から各国の団体活動を見学させた戴きました。欧州諸国では男女平等が当然の如く、生活して居る中に於いてもアル中の夫に暴力を振われてかけ込寺に母子共に保護される人、妻に逃げられて子供連れでは働きに出られないという男性家族の保護、養老院では明るく楽しく自分の趣味を活かして刺繍をする、絵を画く、機を織る等々のグループ活動がなされています。日本でもかく有らねば、という思いに絡られました。同行の丹後の方で「土地を提供してもいいですよ」といって下さる方も居られました。現地では「税金は高いけれど施設が整っているから不満に思っている人は居りません」といわれる方が多い事に羨ましさを感じました。高齢化時代の日本にあっても是非そうあって欲しいと思います。男女を問わず、年寄りは年寄りなりに楽しく生きて行ける場所を一つ一つ造っていく努力と呼びかけをしていかねばならないと思います。その内にとか誰かがやってくれるだろう等と思っているのでは私達の今生きていく間には間に合わないと思います。〝今やらねばならない〟という思いの結果が京のあけぼのの真の意味ではないかと私は思います。

（京都商工会議所婦人会）

「てるびっと」に期待して

小泉和子

「名は体を表す」といわれていますが、〝あけぼの〟という言葉には、ふくよかな期待と活動の意欲をかもし出す雰囲気があります。

特に女性の感性が育まれ、安心、安全の男女共生社会の実現のために、各分野から海外研修に参加された京の女性達の活動のよりどころとして、情報交換、交流、研修の組織にピッタリの名称だと思っています。

この度は「てるびっと」と国際性豊かな楽しい機関誌も創刊され、個人から組織へと交流の輪が広がり、明日に向かって活動する京の女たちの要として発展されることを期待しています。

（京都府婦人の船同窓会）

ロシアの縁

武田公子

「二十二日は空いてはりますか？　時代祭と鞍馬の火祭見物」と誘われたのは、レッドアローの会からでした。モスクワから乗った夜行列車の名をとって私達九名のロシア研修グループは事ある毎に集まります。そして思い出話にひたるひと時は、各自忙中閑を楽しむ心地、団長を先頭に全員がとてもなごやかに過ごして来たこの一年でした。

ロシア研修では、彼我の国力、社会事情、人間性、人情等大いに啓蒙され、民間外交増進の必要性を学びましたが、私はグループの誕生をこよなく喜び、冒頭のお誘いにすぐ応じたのは勿論でした。

（京都市地域女性連合会）

マンネリを破る大切さ

稲味史子

私たち女性団体にとって、自立、男女平等社会の実現などに向けた学習活動はもちろんですが、その一方で文化や芸術で豊かな情操を養うことも重要です。そうした意味で九月下旬、城陽市では初の元宝塚スターを迎えたシャンソン&トークショーをメーンに「城陽女性フェスティバル」を催しました。例年の文化祭（作品展示、お茶席、コーヒーコーナー）とひと味変えた形ながら、会員たちの反応は上々。企画、準備、接待から裏方まで進んで分担し、意外なほどの盛り上がりよう。観客の評判も満点で、マンネリを破ることの大切さが体験でき、よい勉強になりました。

（京都府連合婦人会）

総　会　報　告

▶1993年度事業報告◀

4月23日　婦人週間「京都のつどい」参加
4月26日　総会準備役員会
5月18日　総会及び講演会　於：ホテルニュー京都
9月24日　1993年度海外研修新入会員9名入会
10月30日　あけぼのフェスティバル参加
11月13日
　～14日　ＫＹＯのあけぼのフェスティバル参加
12月18日　国際協力府民講座参加
12月25日　役員研修会

▶1994年度総会及び講演会◀　　平成6年6月16日

総会次第　　P.M.1：30～2：00

1．開　会
2．会長あいさつ
3．来賓あいさつ
4．議　事
　1）1993年度事業報告
　2）1993年度会計決算報告
　3）1993年度会計監査報告
　4）1994年度事業計画案
　5）1994年度会計予算案
5．新入会員紹介（自己紹介）
6．その他
7．閉　会

ティータイム

ディスカッション　　P.M.2：20～4：30
テーマ　「海外研修に学んだもの」
パネラー　山下弥生氏
　　稲味史子氏
　　服部和子氏
コーディネイター
　　栗田澄子氏

▶1994年度事業計画◀

4月28日　京都府女性団体懇話会　出席
4月　婦人週間「京都のつどい」参加
5月18日　総会準備　役員会
6月16日　総会　於：ウイングス京都
6月～8月　あけぼの大学地域講座（城陽市）参加
9月～12月　あけぼの大学地域講座（綾部市）参加
10月29日
　～30日　全国都市緑化きょうとフェア　参加
10月　1994年度海外研修　出発
10月　京都府女性団体懇話会　参加
11月　機関紙発行
1月～2月　あけぼの大学特別講座　参加
3月5日　ＫＹＯのあけぼのフェスティバル
3月　京都府女性団体懇話会　参加

おしらせ

【第6回　ＫＹＯのあけぼのフェスティバル'95春】

男女共同参画社会の創造に向けて、講演やシンポジウムなどにより、皆さんと共に考え作り上げるフェスティバルです。

主　催：京都府・ＫＹＯのあけぼのフェスティバル実行委員会
日　時：平成7年3月5日(日)10：30～16：30
場　所：国立京都国際会館（京都市左京区宝ケ池）

【第4回　世界女性会議】

1985年第3回世界婦人会議で採択された「西暦2000年に向けての地位向上のためのナイロビ将来戦略」の実現に向けて、来年初めてアジアで開かれるものです。

主　催：国際連合
日　時：平成6年8月30日～9月18日　NGOフォーラム
　　同上9月4日～15日　第4回世界女性会議
場　所：中国・北京

編集後記

この度、ＫＹＯのあけぼの会が目的達成に向けて取り組みました『てるびっと』の創刊に当たり、京都府をはじめ関係団体等多くの方々のお力添えに感謝申し上げますとともに、産声をあげた『てるびっと』が、激変する社会に対応する新しい生き方や、ネットワークの広がりへの道しるべとして大きく育つことを念じ、あとがきといたします。

発行責任者
海外研修ＫＹＯのあけぼの会
会長　田中田鶴子